

小康状態となった義通は、やがて輿に揺られて白浜城へと帰っていった。義豊は嫡男の又三郎をこれに同行させた。

「おじいさまの話し相手となるがよい」

その云いつけに従い、年若い又三郎は発った。そして、義豊は、こののち早晩に一手を担う家督のことを思索した。

在地を一手に掌握するへ一統、その理想に物事が運ばぬなら、なんとしたらよいものか。

祖父や父のように、在地の助けを借りながら国を富ませ拡大し、来るべき新しい世代に想いを託すというのか。

しかし、義豊は頭がよすぎた。ゆえにどの子も凡庸に映る。志を託すに足りない。

その答えを導き出すことは不可能だった。

絶る想いをぶつけた先は、鎌倉の玉隠英璵である。

「御坊、太郎は未熟に候。せめて法号と雅号をして導きたまえ」

という書状を差し出した真意は、理想と現実の違いに苦悩するが故であった。玉隠英璵はそれを見透かしたに違いない。

「房州の賢使君」

そう持ち上げた申し様で返書をしたためた玉隠英璵の真意は

「いかほどの畏れやある」

という叱咤が籠められていた。

賢使君。

それは古代中華で刺史を敬称する意味であり、また、国守の唐名ともされる。即ち古河公方の代官としての安房国の国主、ということだ。

これに賢という冠を載せた玉隠英璵は、優れた古河公方副帥として、義豊を称しているのである。(一統)の思想が古河公方のそれに通じる以上、それを志す者が他にない今となっては、玉隠英璵にとつては、義豊こそ賢使君と呼ぶに足る人物だった。

折れるな。

初心、忘れるべからず。

玉隠英璵からの無言の声援が、この呼称に含

まれていたのではあるまいか。

義豊の望んだ法号と雅号について、玉隠英璵はこのように応えた。

法号〈長義〉。

雅号〈高巖〉。

玉隠英璵は太田道灌をよく識っていた。

道灌は教養に富み、それを身につけたうえで、内政外交合戦に生かすことで民衆に支持された。足軽を育てて兵となし、勝ち方をよく知る将であった。しかし、そういう将は、道灌が暗殺された後は世に登場していない。このことを、玉隠英璵は長く憂っていた。

義豊と道灌の唯一の共通点。

それは、孔子や孟子の学問に励み、孫子と呉子の兵法書を学び、和歌・吟詠にも通じ、古今の多くの人の書を集めて文字もよくする、ということだった。それをして、文武を兼ね備えたと断じるのは早計というものだが、この乱れ汚れた時代にやつと出会った道灌と同じ人種として、玉隠英璵は義豊のことを、盲目的なまでに高く評価していたのかも知れない。

義豊は揺らぐ気持を押し留め、こののちも(一統)を為す機を秘かに何う意思を固めた。

これより三年後、玉隠英璵は鎌倉にて入滅する。

小田原城の伊勢氏綱は古河公方・足利高基にうまく取り入り、それだけではなく、最近では真里谷信保ひいては小弓公方とも誼を通じていた。これは上杉氏打倒を画策する伊勢氏の遠交近政策である。

大森・三浦を失った扇谷上杉氏はもはや力を失っていた。

もしも太田道灌さえ生きていたら、きっと伊勢宗瑞は野望を露わにすることもなく、やがては世を去ったことだろう。小さなことに囚われた上杉一族は、小事を為して大事を招いた愚かさを悔いても悔やみきれなかった。代替わりしながらも、彼らは常に

「いまここに道灌入道がいてくれたら」

という妄執に縛られる。  
それほどまでに、扇谷上杉氏は、存亡の極みに立たされていたのである。  
十十十

賢使君(3)

夢酔 藤山